

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月25日現在

機関番号：84301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02159

研究課題名(和文) 実作例に基づく日本の宮廷装束および調度の基礎的研究

研究課題名(英文) Material Study on Japanese Court Cultures

研究代表者

山川 暁 (YAMAKAWA, Aki)

独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部工芸室・室長

研究者番号：70250016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本の宮廷装束および調度の所蔵調査に基づいて作品の基礎的な調書を作成し、宮廷の物質文化の実像に迫ることを目的とした本研究では、303件の作品調書を作成し、1151枚の調査画像を集成した。特に重要な27件については、保存公開用の画像124枚を撮影した。さらに、文献資料により428件の当該資料の存在を確認してリスト化し、これらのデータを文字情報による簡易データベースとしてまとめた。本研究で得られた成果に基づき、2016年には国際学会において発表を行うとともに論文を電子出版した。2016年と2017年には、京都国立博物館において宮廷装束および調度の展覧会を行い、研究成果の一端を公開した。

研究成果の概要(英文)：We have written a simple report based on our investigation of Japanese court costumes and furnishings in museum collections. The purpose of this study was to gain a more intimate understanding of court material culture. For this we created 303 investigation sheets and amassed 1151 research images. For twenty-seven pieces of particular importance, we also took 124 images for archival and public use. In addition, the 428 related written documents we consulted were listed up and then the data was summarized in a simple database of written information. In 2016 a paper based on the fruits of this research was presented at an international conference and then published on line. In 2016 and 2017 exhibitions of court costumes and furnishings were mounted at the Kyoto National Museum, thereby bringing to the public one portion of the research results.

研究分野：美術史

キーワード：工芸史 染織史 有職故実 宮廷装束 宮廷調度

1. 研究開始当初の背景

皇室行事や神事の場で目にする日本の伝統的な宮廷装束および調度ではあるが、日本人が培ってきた美意識を継承するものでありながら、一般には縁遠いものとなっている。前近代では、この種の装束や調度に関わる礼式や典拠の知識は有職と呼ばれ、公武ともに重んじられるとともに、その研究を家職とする家もあった。国文学や日本史学の領域ではこの伝統を受け継ぎ、文献や絵画資料に基づく研究が現在も重ねられているが、美術史学においては、現存する実作例に依る宮廷装束および調度の研究は、ほとんど手つかずの状況であった。

2. 研究の目的

現存する作例の調査を通して、かつての日本の宮廷における物質文化の実像に可能な限り迫ることを目的とする。あわせて、京都国立博物館における展示などを通して研究成果を広く一般に公開するとともに、国際的な場においても日本の宮廷が培った美意識を広く紹介する。

3. 研究の方法

まず、本研究において対象とする伝統的な宮廷装束や調度が、どこにどの程度所蔵されているか、またそれらの来歴や所蔵されるに至った経緯などの調査を、文献資料を通して実施する。

次に、この種の作例がある程度まとまって所蔵されていることがすでに判明している国立博物館(旧帝室博物館)において、実作例の調査を実施し、寸法や仕様などの基礎的な情報を記載した調書を作成するとともに調査画像を集積する。調査の結果、重要と判断した作品については、保存および公開用の質の高い画像を撮影する。

最後に、これらの調査データを、文字情報による簡易データベースとしてまとめる。

4. 研究成果

文献資料を通して、428件の当該資料の存在の所蔵を確認しリスト化した。303件の作品について作品調査を実施して調書を作成し、1151枚の調査画像を集成した。特に重要な27件については、保存公開用の画像124枚を撮影した。さらに、これらのデータを文字情報による簡易データベースとしてまとめた。

この作業過程の中で、現存するこの種の作品のほぼすべてが江戸時代以降の作例であることが改めて浮き彫りとなった。平安時代に完成をみた日本の宮廷装束ではあるが、古代・中世の作品は、神々に奉納された神宝を除き、ほぼ存在しない。さらに、現存作例で

は最も古い部類に属する桃山から江戸時代初期に製作された作例は、応仁の乱以降の宮廷社会の疲弊によって途絶えた有職の復興を意図して製作されているものの、往時とは異なる形式で再興された点があることを実作例から確認した。

このような江戸時代初期の不十分な有職復興は、当時の元号を付して「寛永有職」と称され、揶揄するかのように入れられることもあるが、当時の文献史料を確認すると、途絶えた朝儀の再興のために様々な資料研究を行っていたことが窺われる。実作例の調査を進める過程で、有職研究の成果による修正を経た現代の宮廷装束のみを知る我々の目からは、異質に思える要素を含む作例に出会うことがあったが、これは先人の試行錯誤の結果と考えられる。

例えば、霊鑑寺に所蔵される現存最古の女性用宮廷装束の皆具である「五衣唐衣装束 東福門院和子所用」は、これまでも「裳」の形状が平安時代の絵画作例とは異なることが指摘されており寛永有職の典型とされていたが、このほかに「纏繻裳」と呼ばれる平安時代以前の宮廷装束に由来する品と、宮廷調度である几帳の「帳」も含まれていた。これは内乱の影響で久しく着用されることがなかった装束を復興する過程で生じた混乱の結果とみなすことができる。伝統をそのままに継承していると考えられがちな有職装束においても断絶と再興という問題があることを、作品調査を通して明確に意識することができた。その問題意識は、京都国立博物館において開催した二回目の展示「御所文化を受け継ぐ 近世・近代の有職研究」の主題ともなった。

また、所蔵先調査を進める中で、該当作品のうち近世に製作された作品の所蔵先は限定的であることが明らかになった。

近世の作品は、着用者に縁のある社寺に奉納された結果伝えられることが多い。京都国立博物館が所蔵する、有栖川宮家に伝来し高松宮家が相伝した歴代親王ゆかりの装束類は、公家が形成した唯一の宮廷装束コレクションであり、極めて特殊な例といえる。また該当作品群の主たる使用場所であった京都御所において使用および備蓄されていた品々の多くは、帝室博物館の流れを汲む東京・京都・奈良の国立博物館に分蔵され、一部が宮内庁に保管されていた。御所ゆかりの作品群が旧帝室博物館に移管された当時の経緯を、京都国立博物館が所蔵する帝室博物館の行政文書に探ったところ、そこには明治維新後に宮廷儀礼が西欧化する中で、これらの伝統的な装束および調度類が不用となり、二度と使用する機会がないと判断された結果、帝室博物館へ移管されたことが明らかとなった。明治においてもまた、有職は断絶を余儀なくされていたといえよう。

一方、近代の作例は、華族旧蔵あるいは即位大礼などの宮廷儀礼に関わる染織品がそ

の中核であり、各所に相当数が所蔵されていた。

以上のような本研究で得られた成果の一部は、2016年にイタリア・ミラノで開催された国際博物館会議服飾委員会において発表するとともに、発表内容をまとめた論文を電子出版として公開した。会議は「文化的景観と服飾」をテーマとしていたため、京都という土地において現在も製作が続けられているインド由来の形式を残す仏教僧の衣服、中国由来の形式を一部に残しながら和様化していった宮廷装束、日本民族の根源的な衣服である小袖形式衣服の三種を取り上げ、国際的には「きもの」ほど認知度が高くない日本の宮廷装束について、その成立過程を紹介した。

また、2016年2月～3月、2017年12月～2018年1月の二回、京都国立博物館において宮廷装束および調度の展示会を行い、研究成果の一端を広く一般に公開した。

第一回目の展示となる「宮廷の装束」においては、日本に大和朝廷が誕生し、各種の制度が整えられていく中で手本とされた中国を頂点とする大陸の文化に依拠して、日本の宮中の服制もまた隋や唐にならって整備されたことを紹介するとともに、それらが平安時代に日本の自然環境に順応した生活様式に依拠して変貌を遂げ、その結果として、束帯や五衣裳唐衣裳束（十二単）に代表される日本の宮廷装束の伝統が生まれたことを、天皇家や宮家ゆかりの装束を通して紹介した。

作品調査を終えた京都国立博物館収蔵品の装束を中心に、展示室一室を使用した展示であり、これまでに知られていた有職装束の概要を、視覚的に分かりやすく構成することを目的とした。



「宮廷の装束」展示風景

研究最終年度、二回目の展示となる「御所文化を受け継ぐ 近世・近代の有職研究」は、展示室三室にわたって、内乱による断絶を経て江戸時代初期に復興が意図され、近世を通じてその検証が続けられた有職研究の紹介と、明治維新後の西欧化が宮廷礼法もたらした変化の二点を展示の主題とした。これは、本研究で明確となった問題意識を展示と

いう形で示したものである。

まず、宮廷の儀式において用いる調度、装束、立居振舞などには独特の形式と作法があり、それらを滞りなく務めるために、宮廷礼法全般におよぶ知識である「有職」が重要視されていたことを明確に示すために、貴族が詳細な日記を書き残したのは有職を子孫に正確に伝えることを意図しており、それゆえ日記という私的と思われがちな文字史料が家系を越えて広く書き写されていたことを、当館が所蔵する「台記別記」(平安時代の公家・藤原頼長の日記の有職関係記事の抜粋)の近世写本などの展示によって視覚的に紹介した。さらに、後水尾上皇が撰修した「当時年中行事」の写本に記された「応仁の乱以来、武家の勢力が全国に拡大するにつれて宮廷が零落し、大嘗会などの重要な儀式さえも絶えて復興する目処も立たない中、せめて衰退してしまった現状だけでも書き留めておきたい」との記述を取り上げ、この時代の宮廷の状況と有職復興への執心を具体的に提示した。

このような環境のもと、太平の世の到来とともに有職研究が進められ、その成果が相次ぐ朝儀の再興という形で達成された。展示会ではその様相を、高橋宗恒が提出した古典研究の成果である「大内裏図考証」の近世写本や、中心人物である霊元上皇周辺が着用した装束を紹介することにより提示した。これらの装束は、世襲親王家のひとつであった有栖川宮家に伝来し、現在は当館が所蔵するものである。

また、京都御所に伝来した調度品のうちから皇太子元服にかかわる絵画と調度を、有栖川宮家伝来品からは関連装束を選び、それらを組み合わせることで展示することにより、御所の儀式空間の視覚的な追体験を意図した。



「御所文化を受け継ぐ」展示風景

さらに、有栖川宮家伝来品のうちから高位の公家男性が着用する「小直衣」という装束を取り上げ、その生地や文様や袖括り紐から着用者の年齢が明らかになるなど、有職知識の具体例を理解しやすい形で紹介した。

最後に、公家女性の装束の中から、寛永有職の典型とされる「五衣唐衣裳束 東福門院所用」と、有職研究の成果により完成された近代の装束である「五衣唐衣裳束 秩父

宮勢津子妃所用」を並べて比較展示することにより、近世・近代を通じての有職研究の成果を実作例から確認した。そして、「袷袴装束 秩父宮勢津子妃所用」の展示により、近代の宮廷儀礼の西欧化に対応して、屋外で女性が着用することを想定した切袴(くるぶしまでの袴)装束が誕生したことを紹介し、伝統の継承のみが有職ではなく、それは時代に応じて変化していくものであることを明らかにした。

この展示の内容理解の一助として、研究成果を一般向けにまとめた鑑賞ガイドを作成して無料配布するとともに、二回の講座を実施し、本研究で得た最新の知見を広く紹介した。

以上のように、本研究の助成期間においては、中核である宮廷の物質文化の把握を基礎に、その成果の一端を展示・配布物・講座という形で広く一般に公開した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件・インターネット出版)

YAMAKAWA Aki

Kyoto -a Treasure House of Traditional Japanese Costumes-

http://network.icom.museum/fileadmin/user_upload/minisites/costume/pdf/Milan_2016_Proceedings_-_Yamakawa.pdf

(査読なし 2017年1月10日より公開)

〔学会発表〕(計1件)

YAMAKAWA Aki

Kyoto -a Treasure House of Traditional Japanese Costumes-

2016年7月4日

ICOM(国際博物館会議)ミラノ大会

国際服飾委員会

イタリア・ミラノ国際会議場

〔その他〕(計5件)

特集展示「御所文化を受け継ぐ 近世・近代の有職研究」

2017年12月19日～2018年1月28日

京都国立博物館 1-2・3・4 展示室

展示作品数 41件

(和文解説42点、英文解説7点、日・英・中・韓の四言語による音声ガイド6点)

関連講座

「近代の有職故実 江戸時代から伝えられた雅び」(田中潤)

2018年1月20日

京都国立博物館 講堂

関連講座

「京都御所旧蔵品と国立博物館」(山川暁)

2018年1月13日

京都国立博物館 講堂

鑑賞ガイド

「御所文化を受け継ぐ」

(山川暁・猪熊兼樹・田中潤 共著)

A4版 カラー4頁 25000部

2017年12月19日発行

特集展示会場にて無料配布

名品ギャラリー展示「宮廷の装束」

2016年2月3日～3月13日

京都国立博物館 1-4 展示室

展示作品数 22件

(和文解説23点、英文解説1点、日・英・中・韓の四言語による音声ガイド2点)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山川 暁 (YAMAKAWA Aki)

京都国立博物館・学芸部・工芸室長

研究者番号: 70250016

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

永島 明子 (NAGASHIMA Meiko)

京都国立博物館・学芸部・教育室長

研究者番号: 90321554

(4) 研究協力者

猪熊 兼樹 (INOKUMA Kaneki)

文化庁・伝統文化課・主任研究官

(研究期間中に東京国立博物館に異動)

田中 潤 (TANAKA Jun)

学習院大学・非常勤講師

モニカ ベーテ (BETHE Monica)

中世日本研究所・所長